

理 論 編

目 次

I	研究主題	1
II	研究主題設定の理由	1
III	研究目的	2
IV	研究仮説	2
V	研究内容	2
VI	研究方法	3
VII	研究の実際	3
	研究内容1 一人一人の子供の持つ力を高めるコミュニケーション指導を考える	
	(1) 子供の実態に応じたコミュニケーション指導を考える	3
	研究内容2 子供や保護者の将来の生活への願いや考えを大切に、長期的視野に立ったコミュニケーション指導を考える	
	(1) これまでのコミュニケーション指導の問題点を探る	4
	(2) 家庭と連携し、長期的視野に立ったコミュニケーション指導の在り方を考える	5
	研究内容3 卒業後のコミュニケーション指導を考える	
	(1) 卒業生の進路先におけるコミュニケーションの様子から課題を探り、現在の指導の在り方を考える	8
	(2) 卒業後のコミュニケーション指導に関する支援の在り方を考える	8
VIII	研究のまとめ	
	研究内容1 一人一人の子供の持つ力を高めるコミュニケーション指導を考える	
	(1) 取り組みの成果	9
	(2) 今後の課題	9
	研究内容2 子供や保護者の将来の生活への願いを大切に、長期的視野に立ったコミュニケーション指導を考える	
	(1) 取り組みの成果	10
	(2) 今後の課題	11
	研究内容3 卒業後のコミュニケーション指導を考える	
	(1) 取り組みの成果	11
	(2) 今後の課題	11
	総 括	12
IX	今後の課題	12

I 研究主題

伝え合い、分かり合う関係をめざして
一人一人の子供の将来の生活につながるコミュニケーション指導の取り組み

II 研究主題設定の理由

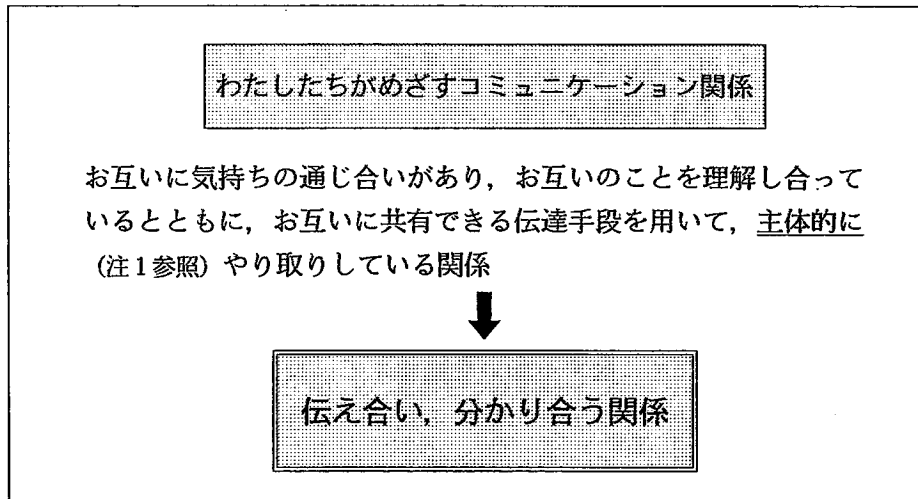


図1 伝え合い、分かり合う関係

わたしたちは平成6年度からの2年間の研究の中で、子供たちとわたしたち教師との関係において、わたしたちが目指す「伝え合い、分かり合う関係」を築いていくためにはどのような取り組みをすればよいかを探ってきた。その成果として子供自身のコミュニケーションに関する力を高めることの必要性とともに、教師が子供をよく観察し、気持ちを理解し、十分に尊重するといった適切なかわりをしていくことの大切さを学ぶことができた。(資料1参照)

しかし、わたしたちの願いは、子供たちがこれまで保護者やわたしたちと築き上げてきた「伝え合い、分かり合う関係」を基に、同様な関係をこれから出会う人たちとも築いてほしいということである。

そこで、平成8年度からの2年間の研究においては、一人一人の子供たちが、将来の生活(注2参照)において、いろいろな人たちと「伝え合い、分かり合う関係」を主体的に築いていくためには、今、どのような取り組みをすればよいかを具体的に探っていくことにした。

.....
(注1) わたしたちが考える「主体的」とは、「自ら意欲的に活動してそれを楽しんだり、積極的に周りに働き掛けたりするとともに、場面や状況に自分なりに見通しを持ち、自分で考えて、選択できること」である。(資料2参照)

(注2) わたしたちが考える「将来の生活」とは、主に「本校卒業後の生活」という意味であるが、それだけではなく、「一年先、一か月先、一週間先の生活」をも含めたものである。そのような意味で「現在(いま)からの生活」すべてを「将来の生活」と考えている。(資料2参照)

Ⅲ 研究目的

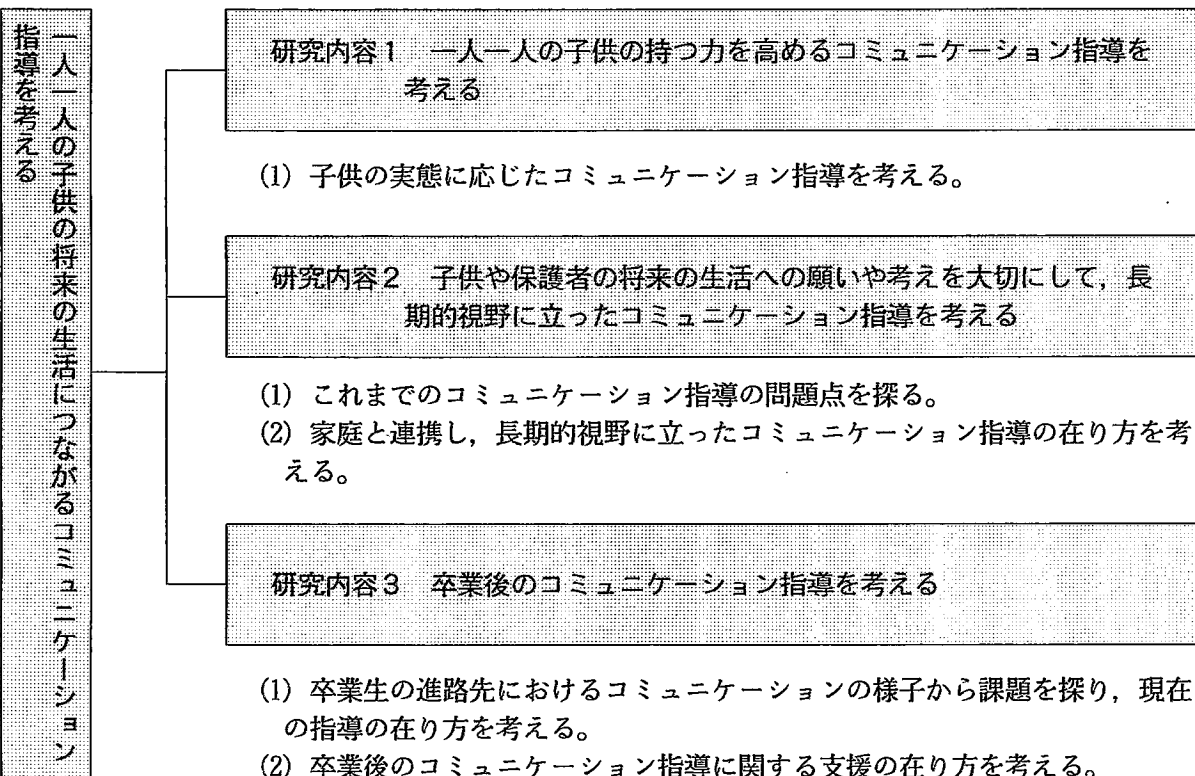
子供たち一人一人が、将来の生活の中で出会う人たちとのかかわり合いの中で、その子供なりに、「伝え合い、分かり合う関係」を主体的に築くことができるようにするためにはどのような取り組みをすればよいかを実践を通して明らかにする。

Ⅳ 研究仮説

コミュニケーション指導において、以下の視点を持って取り組むことで、子供たちは、将来の生活の中で、より多くの人たちと「伝え合い、分かり合う関係」を主体的に築いていくのではないかと考える。

- 子供たちの持つコミュニケーションに関する力を、子供たち一人一人に応じて確実に高めていく方法を整理する。
- 子供や保護者の将来の生活に関する願いを踏まえて、長期的視野に立ちながら、子供や保護者と一緒にコミュニケーションに関する具体的な目標を立て、家庭と学校が同じ考えの下に協力して取り組み、その具体的実践を評価する。
- 本校卒業生の進路先での様子から課題を探り、そこから現在のコミュニケーション指導を考えるとともに、卒業後も保護者や進路先と連携して子供たちを支援する場（機会）を積極的に設ける。


Ⅴ 研究内容



VI 研究方法 (研究計画, 研究組織については資料3参照)

今回の取り組みも前回(平成6, 7年度)と同様に, 全体研究, グループ研究, 学部研究の三つの研究形態を中心に研究を進めていくことにした。すべての研究形態で, 研究内容1~3に取り組んだが, その中でも特に中心に取り組んだ研究内容を以下に示す。

全体研究	研究内容1	A. B. Cの三つのグループ理論の共通理解
	研究内容2	家庭と連携し, 長期的視野に立ったコミュニケーション指導を行う方法の研究と整理
	研究内容3	卒業生の持つ課題の整理と卒業後の支援の在り方の研究と整理
グループ研究	研究内容1	A. B. Cの三つのグループ対象児に応じたコミュニケーション指導の研究と実践
	研究内容2	全体研究の考え方を基にしたグループの事例対象児における実践
	研究内容3	事例研究における卒業生の持つ課題を踏まえた上での目標設定と実践
学部研究	研究内容1	A. B. Cの三つのグループ理論の共通理解と実践
	研究内容2	全体研究の考え方を基にした学部の児童生徒全員における実践
	研究内容3	卒業生の持つ課題を踏まえた上での目標設定と実践及び卒業後の指導(高等部)の実践

 はその研究の形態における中心的取り組みを示す。

VII 研究の実際

研究内容1 一人一人の子供の持つ力を高めるコミュニケーション指導を考える

(1) 子供の実態に応じたコミュニケーション指導を考える

(詳細は研究紀要グループ編参照)

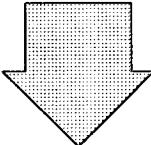
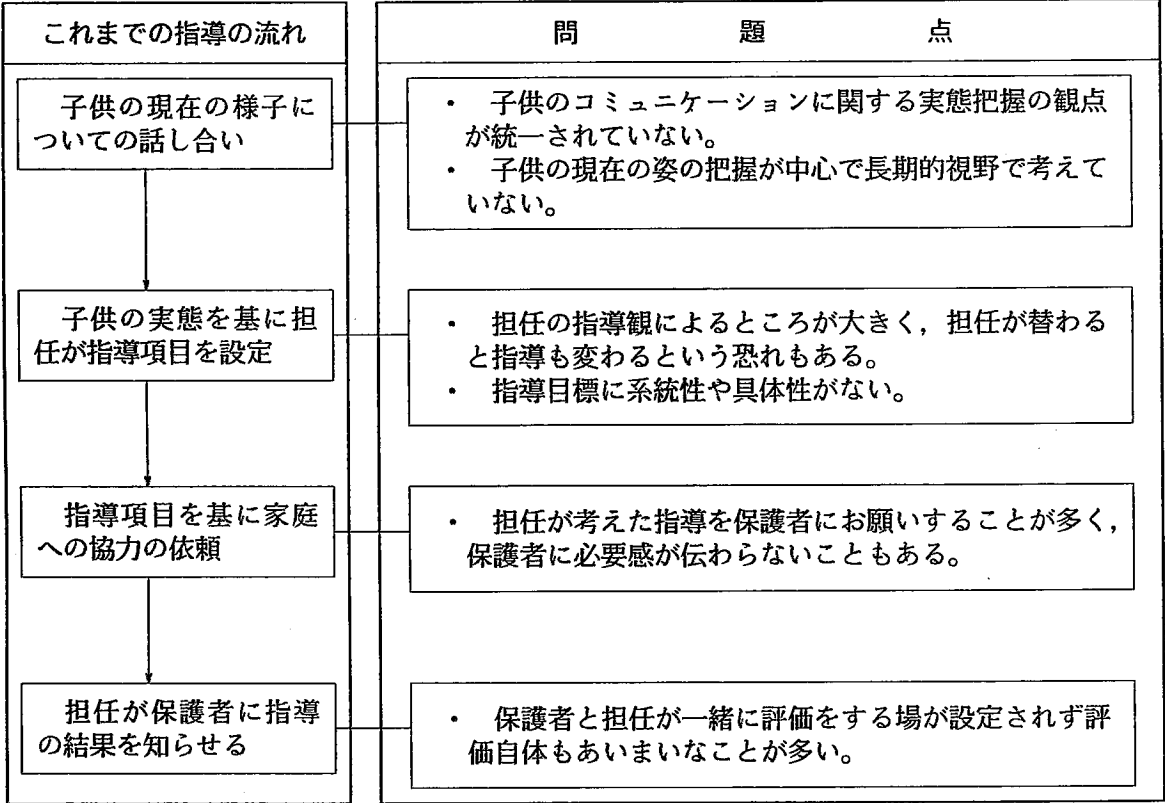
本校の代表的な子供像を考慮して三つのグループを編成し, それぞれのグループが対象とする子供たちのコミュニケーションに関する力を高めていくための手だてを理論とそれに基づく実践により探った。なお, 今回の取り組みでは, 前回の取り組みの理論と実践を基に再度整理し直すとともに, 「目指す将来の子供像」という視点から探っていくことにした。

表1 グループ研究の研究主題及び子供の様相

グループ名	研究主題	対象とする子供の様相
Aグループ	・ 「ことば」を培うためのサイン指導の在り方を探る	・ 言葉を十分にコミュニケーション手段として用いることができない前言語期及びその周辺の子供たち
Bグループ	・ 自閉児の意思伝達の力を高めるための指導の在り方を探る	・ 人との関係が持ちにくく, 相手とのやり取りが十分にできない自閉児と言われる子供たち
Cグループ	・ 会話が豊かになるための指導の在り方を探る	・ 言葉をコミュニケーション手段として使えるが, うまく言い出せなかったり答えられなかったりと言葉を有効に使えていない子供たち

研究内容2 子供や保護者の将来の生活への願いや考えを大切にして、長期的視野に立ったコミュニケーション指導を考える

(1) これまでのコミュニケーション指導の問題点を探る (資料4参照)



<ul style="list-style-type: none"> ● 将来の生活を踏まえて長期的視野に立った一貫性のあるコミュニケーション指導の必要性 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校から家庭への一方的なお願いでなく、同じ考えの下に連携した取り組みを行う必要性
<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニケーションの観点を整理してすべての子供の实態把握を的確にする必要がある。 ・ 子供や保護者が考える子供の将来の生活を踏まえ、多面的な視点から話し合いをする必要がある。 ・ 子供や保護者と一緒に目標を考えるとともに、指導目標を長期的視野に立ち、段階的、具体的に設定する必要がある。 ・ 子供や保護者と一緒に評価する場を設定し、その評価を基に次の目標を考える必要がある。 	

図2 これまでのコミュニケーション指導の問題点

(2) 家庭と連携し、長期的視野に立ったコミュニケーション指導の在り方を考える

これまでのコミュニケーション指導の問題点を踏まえ、わたしたちは、家庭と連携し、長期的視野に立ったコミュニケーション指導を図3のような手続きで行うことにした。

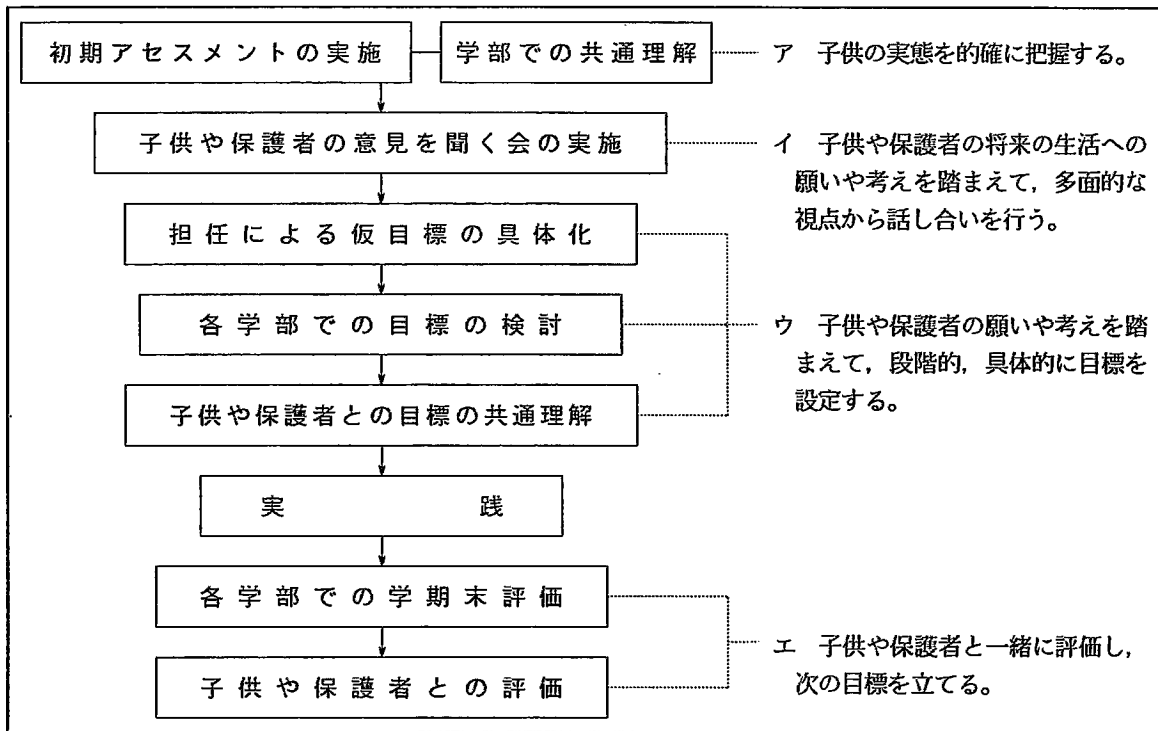
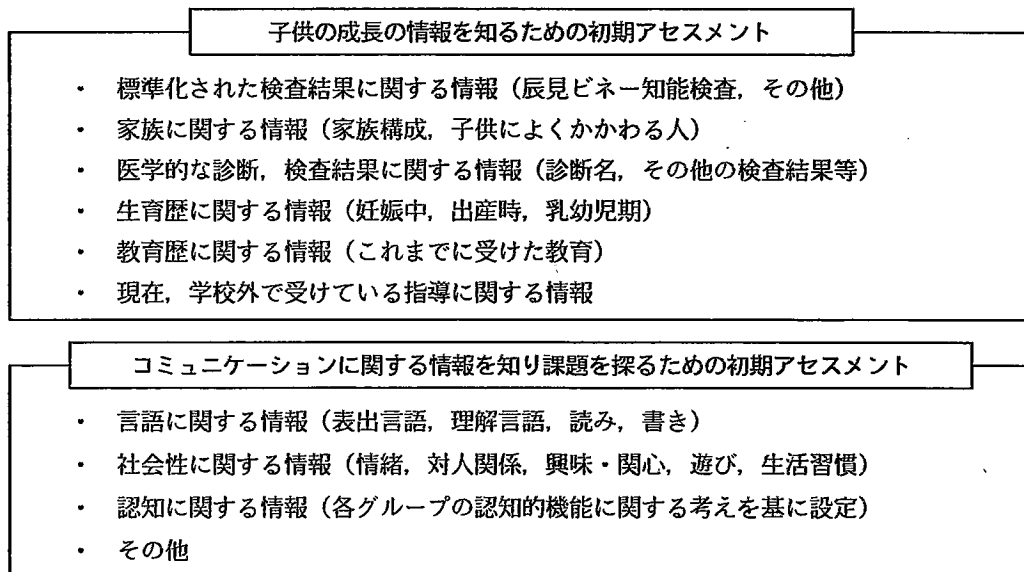


図3 今回のコミュニケーション指導の手続き

ア 子供の实態を的確に把握する (資料5参照)

わたしたちは、子供の实態をできる限りの確に把握するために、以下のような観点で初期アセスメントを行うことにした。



- ※ コミュニケーションの領域を幅広くとらえて設定した。
- ※ アセスメントの観点については、各グループの考え方を整理して設定した。また、記入しやすいように、「評価の説明及び具体例」を示した。
- ※ 一人一人の様相をできるだけ詳しく把握したいということから記述式にした。

イ 子供や保護者の将来の生活への願いや考えを踏まえて、多面的な視点から話し合いを行う (資料6参照)

わたしたちは、長期的視野に立った一貫性のある指導をするために、まず、子供たち一人一人の将来の生活について子供や保護者に願いや考えを聞き、それを踏まえた上で進路や研究に関する専門的立場の教師も交えた多面的な視点からの話し合い(「子供や保護者の意見を聞く会」)を開くことにした。

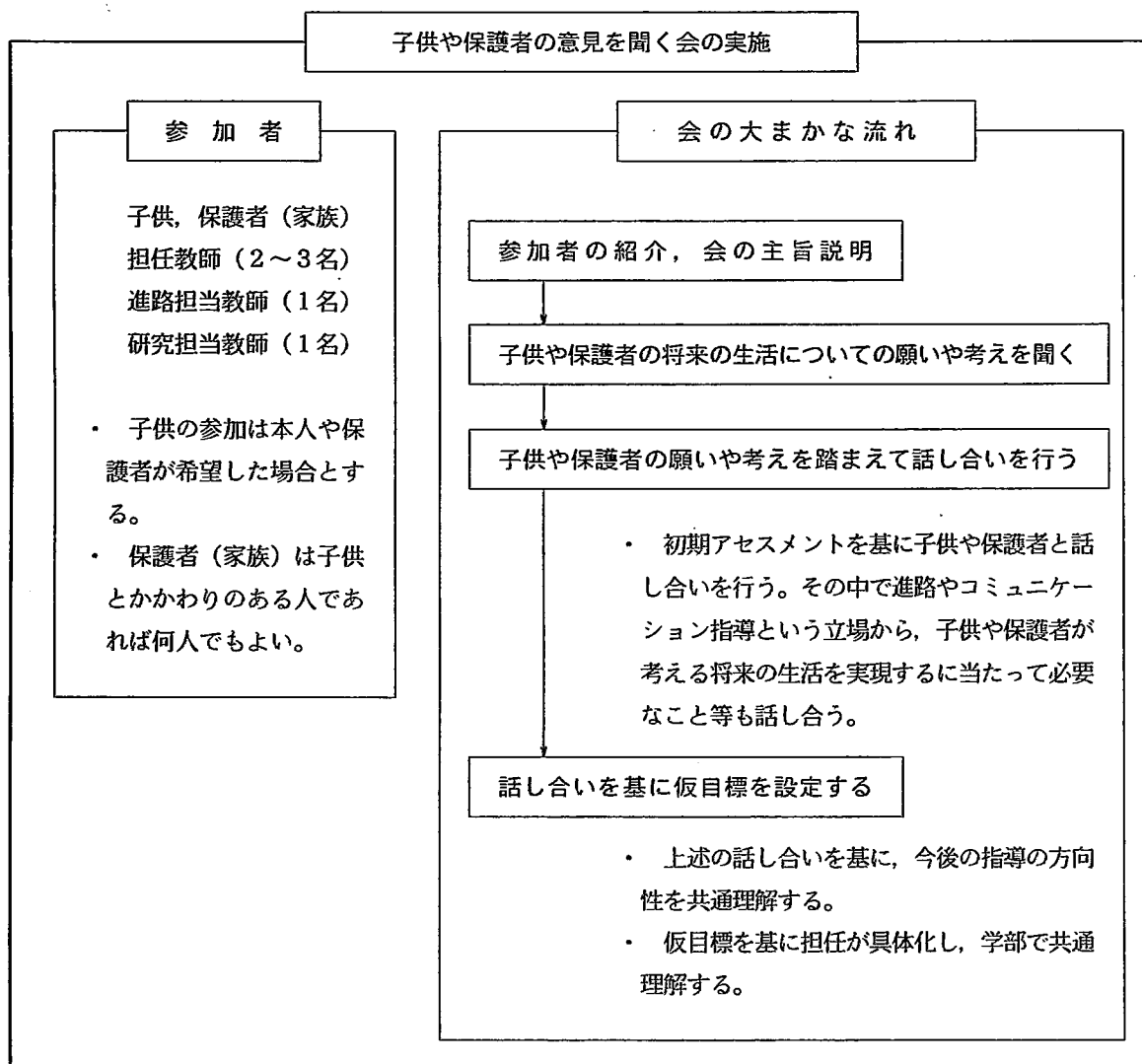


図4 子供や保護者の意見を聞く会

【子供や保護者の意見を聞く会の意義】

- 一人一人の将来の生活について、子供や保護者の願いや考えを聞くことができる。
- 話し合いに進路指導や研究の担当教師が参加することで、進路やコミュニケーションに関する情報を専門的に子供や保護者に提供したり、アドバイスしたりできる。
- 子供や保護者の考えを踏まえて多面的な話し合いをすることで、長期的視野に立った適切な指導目標を設定することができるとともに、一貫した指導が期待できる。
- 子供や保護者が自分たちの将来について考えるきっかけになるとともに、子供の課題を自分たち自身で考え、積極的に教育に参加することが期待できる。

ウ 子供や保護者の願いや考えを踏まえて、段階的、具体的に目標を設定する(資料7参照)
指導目標は、以下のような観点から設定することにした。

- 子供や保護者の願いや考えを踏まえて将来の子供像を念頭に置き、それにつながる段階的な目標を設定する。段階ごとのつながりが分かるように樹系図で表記する。
- コミュニケーションの幅を広くとらえるとともに、子供たちの生活の質を高めていくような目標を設定する。
- 学期目標については、いつ、誰が、どこで行うということなどを具体的に明記することで、確実に指導できるようにする。

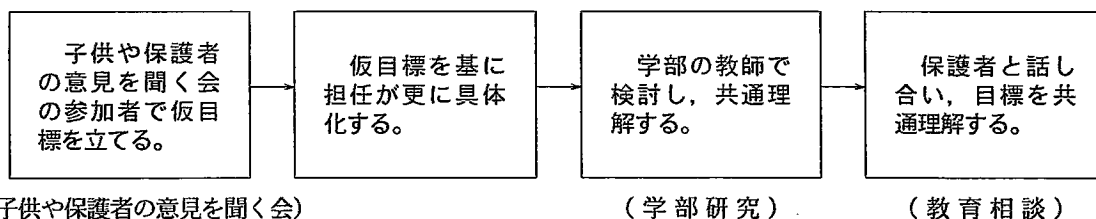
学校卒業目標 …………… 子供が本校を卒業した後の期待される姿を子供や保護者の願いや考えを踏まえた上で想定して設定する。

学部卒業目標 …………… 子供が当該学部を卒業する際の期待される姿を想定して設定する。

学年目標 …………… 学校卒業目標、学部卒業目標を見通して、1年間で達成できそうなことを行動目標として具体的に設定する。

学期目標 …………… 学年目標を踏まえて、学期ごとに達成可能な目標を評価がしやすいような具体的な行動目標として設定する。

● 目標設定までの手順



エ 子供や保護者と一緒に評価し、次の目標を立てる(資料8参照)

学期、学年目標の評価については、以下のような考え方で行うことにした。

- 評価の記入は基本的にA～Eの評価基準とそれを補足する特記事項で行う。
- 評価に客観性を持たせるために、学部の教師全員で一人一人の評価を行う。
- 家庭での取り組みについては、毎学期の教育相談で保護者と担任と一緒に評価する。
- 単に目標が達成されたかどうかだけではなく、次の目標をどうするかという観点から行う。

表2 学期末評価の観点(意味)

評価	評価の意味
A	完全にできる。今より少しステップアップした目標へ。
B	ほぼできるが定着までには至っていない。次は同じ目標で継続した指導が必要。
C	できたり、できなったりで安定しない。同じ目標で継続した指導が必要。
D	ほとんどできなかった。もう少しステップダウンした目標での取り組みが必要。
E	取り組むことができなかった。原因を考えた上で目標の見直しが必要。

研究内容3 卒業後のコミュニケーション指導を考える

(1) 卒業生の進路先におけるコミュニケーションの様子から課題を探り、現在の指導の在り方を考える（資料9参照）

本校卒業生の進路先でのコミュニケーションの様子を知ったり、課題を把握したりすることが、現在在籍中の子供たちに対するコミュニケーション指導を考える際の手掛かりになると考え、進路先にアンケートを行ったり、実際に進路先を訪問したりして卒業生のコミュニケーションに関する様相をまとめ、課題を探った。

アンケートの結果

- 本校卒業生自身が困っている主なこと（事業所、施設、作業所共通）
 - ・ 周りの人たちとうまく会話ができない。
 - ・ 自分の伝えたいことをうまく相手に伝えられない。
- 進路先がコミュニケーション指導として学校に望むこと
 - ・ あいさつや返事ができるようにしてほしい。（事業所、施設、作業所共通）
 - ・ 周りの人たちと積極的に会話を楽しめるようにしてほしい。（事業所）
 - ・ 本人が伝えたいことを伝えられるように何らかの伝達手段を身に付けさせてほしい。（施設、作業所）

(2) 卒業後のコミュニケーション指導に関する支援の在り方を考える（資料10参照）

- 卒業生に対して相談を受ける場、支援を行う場を設定する

本校卒業後、子供たちは進路先、あるいは家庭で様々な課題が生じることが予想される。そこで、これまで以上に積極的に卒業生を支援する機会を設け、子供たちが卒業後の生活の中でも様々な人たちと「伝え合い、分かり合う関係」を主体的に築いていけるようにしたいと考えた。

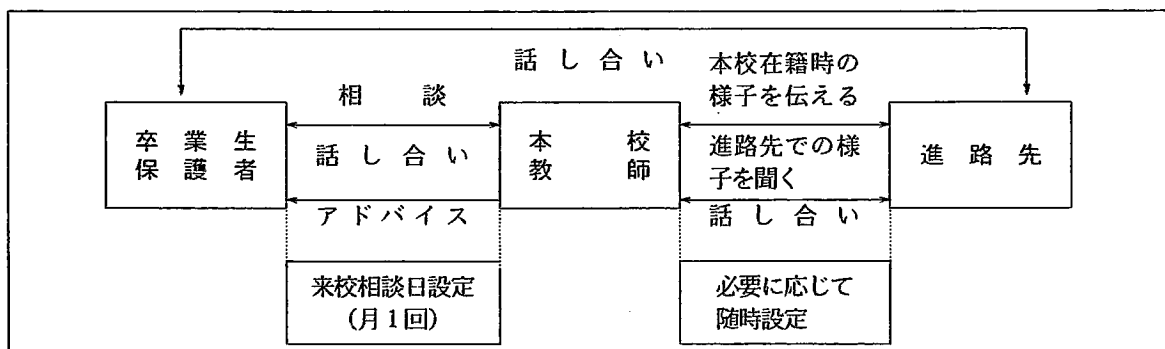


図5 卒業後のコミュニケーション指導の流れ

※ 平成9年度は試行的に実施するために、平成8年度卒業生の中で継続指導が必要と思われる生徒を1名選び、月1回の本人、保護者との話し合い及びアドバイスと進路先との話し合いを行った。

VIII 研究のまとめ

研究内容1 一人一人の子供の持つ力を高めるコミュニケーション指導を考える

一人一人の子供の持つ力を高めるコミュニケーション指導については、前回の研究（資料1参照）の考え方を基にしながら、対象の子供たちの将来の生活を踏まえてという視点を加えて取り組んできた。その研究の成果と課題の詳細については、各グループの研究紀要に述べてある。ここでは、各グループに共通する研究内容として、前回の研究で、わたしたちがコミュニケーション指導を行う際の必要な要素と考えた「伝達手段」、「認知的な力」、「対人関係」の三つの視点について全体的な立場から明らかになったことをまとめてみる。

(1) 取り組みの成果

伝達手段

- 伝わりやすい伝達手段を習得したことで、子供たちは様々な場面で自信を持って主体的に他の人とやり取りする姿が見られるようになった。
- 伝わりやすい伝達手段とは、ある意味では発達的に高次の伝達手段といえるが、それよりも一人一人に応じた伝達手段を習得させることが、子供たちが主体的に「伝え合い、分かり合う関係」を築くことにつながった。
- わたしたちから子供たちへ伝える際も、子供たちにとってどうすれば分かりやすいかという視点で考えることが重要であることに気付いた。

認知的な力

- 各グループで整理された認知的な力にアプローチすることは、子供たち一人一人のコミュニケーションに関する力を高めるために有効であった。
- 子供たちが主体的にコミュニケーション関係を築くためには、常に子供たち自身に「見通しを持たせ、自分で考えることを多くすること」が大切であった。
- 認知的な力はコミュニケーションの発達を支えるものとして重要であるが、子供の生活年齢、実態を考慮して指導を行う必要がある。

対人関係

- 対人関係の発達を促す指導を行うことは、子供たちの周りの人たちとのコミュニケーション意欲を高めることにつながった。
- 対人関係の発達を促す際に、子供たちがこの人と一緒にいて楽しい、この人なら信頼できると感じられる存在に教師になるように努力することが重要である。
- 対人関係の発達は、いろいろな経験の中で培われるものであり、授業や日常生活の中で様々な場面を意図的に設定し経験させることも大切である。

(2) 今後の課題

- 各グループの実践の成果と課題を踏まえて、それを授業の中で更に具現化していく必要がある。

研究内容2 子供や保護者の将来の生活への願いや考えを大切にして、長期的視野に
立ったコミュニケーション指導を考える

(1) 取り組みの成果

(資料11, 12参照)

子供の変容

- 目標達成に向けては、具体的場面を設定して取り組んできたが、そこで達成された行動が他の場面にも般化されている姿を見ることができた。
- 子供に応じた伝達手段を大切にしたことで、子供が主体的に学校での出来事を保護者に伝えたり、家庭での様子を教師に伝えたりといった様子が多くなった。
- 一人で近所の店に買い物に行けるようにするなど、コミュニケーションを幅広くとらえ、生活の質を高めるような目標を設定したことで、地域社会の人たちとも主体的にやり取りする姿が見られるようになった。

教師の意識,取り組みの変容

- 子供をよく観察し、子供の気持ちを理解し、尊重するといった子供たちとの関係を築くための基本的な姿勢が本校教師全体に浸透してきた。
- 目標を段階的、具体的にすることで、それまで漠然としていたことが明確になり、常に意識を高く持って取り組むことができた。
- 保護者に指導目標を明示したことで、これまで以上に責任を持ってそれぞれの教師が工夫して取り組むようになった。
- 学部で目標や評価を共通理解して取り組んだことで、自分のクラス以外の子供にもこれまで以上に目が向くようになった。また、共通理解の過程を通して、自分のクラスの子供に対する指導の手掛かりを得ることができた。
- 小、中学部の教師も子供や保護者の意見を聞く会に参加する中で子供たちの卒業後に関する意識が高まり、積極的に情報を得ようとするようになった。

保護者の意識の変容

- 家庭でも必要な子供にはサインを使ったり、写真カードを準備して伝わりやすい伝達手段を心掛けたり、子供の自発的な会話を待とうとする姿勢を持ったりするようになった。
- 小、中学部の保護者にとってはあまり考えることがなかった将来の生活について、家族で話題にしたり、実際に施設に見学に行ったりと意識が高くなった。
- 父親の子供の教育に積極的に取り組もうとする意識が高まった。

家庭と学校との連携の強化

- 子供や保護者の意見を聞く会の中で一緒に話し合い目標を立てたことで、保護者の意識も高まり家庭でも実際に取り組まれることが多くなった。
- 家庭や学校での取り組みについて、これまで以上に報告、連絡し合うことが多くなった。

(2) 今後の課題

- 子供を観察する目を養ったり、子供に応じた指導の在り方について更に共通理解したりするとともに、これまで以上に専門家としての教師の資質を高める必要がある。
- 子供や保護者の意見を聞く会の持ち方について、時期、参加者等の検討が必要である。
- 目標を更に具体化し、実践しやすくする必要がある。
- 評価に客観性を持たせる方法を工夫したり、観点を整理し直したりする必要がある。

研究内容3 卒業後のコミュニケーション指導を考える

(1) 取り組みの成果

(資料10参照)

卒業生の課題からの指導の在り方の検討

- 卒業生の進路先での課題や進路先の要望を把握することで、将来の生活を考えて目標を立てる際にもそれを意識して設定されることも多かった。また、早期から取り組むことで段階的な指導ができ、子供に無理をさせずに課題解決ができつつある。

進路先との連携

- 進路先に子供のコミュニケーションの様子を詳しく伝え、話し合いを持ったことで、進路先でも子供のペースを尊重したり、子供に応じた働き掛けを行ったりする様子が見られた。
- 進路先からも子供が困っている際には学校に相談に乗ってほしいなどの要望が出され、学校が必要に応じて卒業生と進路先とのパイプ役を担うことが増えてきた。

卒業後の指導

- 卒業生の進路先での様子をこれまで以上に気に掛けることが増えた。
- 子供や保護者も不安に感じていることや困っていることについて、学校に相談しやすくなった。

(2) 今後の課題

- 卒業後の支援の機会を月一回土曜日に時間を設定したが、学校行事や学部行事の関係で設定された日に対応できなかったことが多かった。今回の取り組みは高等部を中心とした取り組みであったが、学校行事に組み入れるなど学校全体で考えていく必要がある。
- 今回は対象を絞った上での取り組みであったが、今後卒業生全員を対象とするとなると、現実的には現在の体制では対応しきれない。子供や保護者との話し合いにしても進路先との話し合いにしても、現在の体制で行える可能性と限界性を明確にする必要がある。

- この二年間の取り組みだけで、「子供たちが将来の生活で出会う人たちとかかわり合う中で、その子供なりに『伝え合い、分かり合う関係』を主体的に築いていくことができる。」という結論を出すのは困難である。ただ、二年間のまとめとして言えることは、子供たちが取り組み前と比べて、主体的に周りのいろいろな人たちとかかわろうとする様子が見られつつあることである。それは、一人一人の子供が目標を達成し、変容していったとともに、子供を取り巻く教師、そして保護者が変わったことが大きな要因ではないかと考える。そのような意味では、この二年間の取り組みを今後も継続し、子供たちの目標が一つずつ達成されるとともに、わたしたち教師や保護者が適切なかかわりを続けることが、本研究の目的を達成するためには不可欠であると考えられる。

IX 今後の課題 (資料13参照)

- コミュニケーションの指導方法に関する更なる研究
- 家庭との連携の在り方の更なる模索
- 伝えたいという意欲が高まるような感動体験豊かな授業の研究
- 子供たちを取り巻く地域社会との連携の在り方の模索
- すべての領域において一人一人の子供に応じた指導がより充実するような教育課程の編成の検討

【参考文献】

- ・ 鹿児島大学教育学部附属養護学校 (1995) : 研究紀要第10集
「伝え合い、分かり合う関係をめざして」
- ・ 財団法人安田生命事業団 (1995) : 個別教育計画の理念と実践
- ・ 全日本特殊教育研究連盟 (1996) : 発達の遅れと教育No.470「就学相談のこれから」
- ・ 全日本特殊教育研究連盟 (1996) : 発達の遅れと教育No.469「新・教師のための福祉就労
ハンドブック」
- ・ 小出 進・大南 英明 (1984) : 精神発達遅滞児の進路指導と卒業後指導 学研
- ・ 菅原 廣一 (1992) : コミュニケーション障害児の診断と教育に関する研究
国立特殊教育研究所
- ・ 久留 一郎 (1993) : 情緒障害児への発達援助 教育と医学11 慶應通信
- ・ 長崎 勤・小野里美帆 (1996) : コミュニケーションの発達と指導プログラム
日本文化科学社
- ・ 国立特殊教育研究所 (1994) : 「コミュニケーション障害への援助」報告書
- ・ M.Beveridge 他 (1994) : 知的障害者の言語とコミュニケーション 今野和夫監訳
学苑社
- ・ 竹田契一・里見恵子著 (1994) : インリアル・アプローチ 日本文化科学社